

# テレビ時代の大統領選挙

1989年大統領選挙戦が  
90年代政治に示唆するもの

中川文雄

## はじめに

本稿では、ブラジルの1989年大統領選挙で各候補がいかなる方式で選挙戦を戦い、それがどんな結果を生んだかをたどりながら、そのなかで、政治マーケティングの技術が選挙戦にどのように入り込んでいたかを、また、テレビが選挙戦にどのような影響を及ぼしていたかを見ることにしたい。

選挙戦にテレビ放送が持ち込まれると、有権者が候補者の政策内容や実績で優劣を判断することが少なくなり、有権者に考える暇を与えないで候補者の一面を記憶させ、他方では候補者の外観、動作、表現、話し方を直に見せることで有権者の判断を大きく動かすことになる。候補者はニュースや他の番組の編成に働きかけことで自己に有利なイメージと情報をつくり出し、それを有権者に送り込む。こうした要素をいかに自陣営に有利に、他陣営に不利になるよう活かすかは政治マーケティングの狙うところであり、勝者のコーロル陣営は、この点で他陣営に先んじていたかに思われる。

このことは、オーウェルがおそれた権力者による電子技術を使った国民操作という未来図がブラジルにも入り込んだとして、それに恐怖と警戒の念を強める声を生んだ。それ自体は過剰反応であ

ったかも知れないが、今後の大統領選挙は電子メディアの巨大な存在を無視しては、それへの周到な戦略をもたずしては戦えないというのが、1989年大統領選挙からの苦い教訓であろう。

## 1 1989年大統領選挙戦略の新要素 ——テレビ、世論調査、政治マーケティング——

### 1. 1989年大統領選と政治マーケティング

1989年末ブラジルで行なわれた大統領選挙は既存政党や伝統的政治家に苦い敗北感を与えた。選挙の8カ月前までは、よもやと思われていた新顔候補が既存政党の支えなしに新しいメディアを有效地に活かした政治戦略で浮上し、最終的に勝利を握ったからである。

1989年3月半ばまでは、フェルナンド・コロルの名はテレビの全国ニュースでマラジャ(仕事をしないのに政府から高禄を食んでいるもの)狩りをしているアラゴアス州知事として報じられ、ある程度知られていたものの、それが大統領候補として浮上するとは、国民もまた、コロルの競争相手となる大物政治家たちも、まったく考えていなかった。コロルの従兄が経営する世論調査兼PR会社が88年12月に独自の世論調査を行ない、そこでは来るべき大統領選挙でどの候補を選択するかとの問い合わせに、ブリゾーラ、シルヴィオ・サントス、

ルーラに次いでコーロルは4位(5%)を占めていたが、この事実は注目されなかった。党組織を持ち経験豊かな大物政治家たちを相手にして、政党的支えがほとんどない新人が勝てるとは、当時の常識では考えられなかつたからである。

ブラジルで国民による大統領直接選挙が行なわれるのは29年振りのことである。多くの国民にとって、また、政治家の相当数にとっても、1960年10月の大統領選挙のことは、ましてや、それ以前の大統領選挙は記憶になかった。選挙としてイメージされるものは、軍事政権下と民政移管後に行なわれた国會議員選挙、知事・市長選挙、州・市会議員選挙であり、そこでの選挙運動の方式は、次のようなものであった。

(1)党組織が運動員にパトロンなど票を支配している人間の説得をさせる。こうした時に企業、労組、職能団体、教会や宗教団体の講の責任者に働きかける。(2)もちろん、候補者が市民の間をかけ廻って握手を重ねることは大切である。(3)さらに知事選、市長選などで大規模なものになると、コミシオといわれる大衆集会が重要となる。人々をサンバのリズムでひきよせ、多くの支持者と候補者が大演説をぶつコミシオは、候補者陣営との一体感を強めるのに有効である。(4)マスコミは利用されたが、より重要なのは組織とネットワークを使って票を集め、また、草の根的に市民と直接接觸することであった。

8200万の有権者が1人を選ぶ大統領選挙ではこうした方式で充分なのであろうか。もちろん、それぞれの行き方は重要であり、それを怠ってはならないのだが、マスコミの利用、特にテレビを使って数千万の視聴者にいかに印象づけるかが大きな鍵となってくる。それは単にテレビ政見放送やテレビ討論で、いかに映り、いかに話すかという技術的な問題だけではなく、テレビ局そのものに食い入って、そのニュースや他の番組をいかに自分に有利なように編集させるか、あるいは、有権者が候補者の優劣を判断するのに大きく影響する

世論調査をいかにタイミングよく活用するかといった政治マーケティングの戦略や戦術の問題である。党組織では劣勢なコーロルも、この政治マーケティングでは他候補より有利な条件を備え、かつそれを重視していた。彼の陣営には政治マーケティングの専門家が何人も協力しており、彼らが戦略を立てていった。

## 2. コーロル現象

1989年3月後半、まだ多くの政党が候補者を指名できていない時に、三つの小党がテレビで選挙戦を開始し、そのいずれにも、人気俳優を司会者としてコーロルが登場し、サルネイ政権の無能と腐敗を激しく非難し、不正是法の前で裁かれるべきことを激しい言葉で主張した。彼がアラゴアスで行なっているマラジャ狩りを全国に及ぼすとの言明は、反政府感情、反お役所感情(政府高官は特権をふりかざすのに、その政府機関の窓口は庶民を人でないかのごとくに長時間待たせ、横柄に扱っていることへの反感)を強く抱いている庶民にアピールした。

政治家が自分の身内を政府内のポストにつけ、さらに公用の自動車や飛行機を私用に使う傾向はサルネイ政権下で強まっていた。公務員削減をめぐって大統領と国会は責任のなすり合いをしていった。こんな時だけにコーロルのアピールは新鮮であった。庶民にとってコーロルは、悪を切る若き騎士として映り、救世主の到来を待つ民衆の伝統的感情にかなうものであった。<sup>\*1</sup>

コーロルは小党の選挙番組で売り出すだけでなく、グロボ・ネットワークのニュースやさまざまの番組に出演し、国民の眼にコーロルの姿が焼きつけられ、その主張が伝達された。候補者がテレビ番組に出ることは自由であり、制限はなかった。

---

\*1 Gilberto Velho, "A vitória de Collor uma análise antropológica," *Novos Estudos*, No.26, 1990年3月, 45ページ。

のちに、それを制限する法案が国会に提出されるが、コーロル陣営は全力をあげて、つながりのある議員を抱き込み、その成立を阻止した。<sup>\*2</sup>

テレビを使ってのコーロルの強烈な政府批判、政治家批判の結果は4月の世論調査にあらわれた。この月ギャラップ社の調査でコーロルは大統領候補選択率13%で首位に立った。コーロル陣営はこの事実を喧伝することで国民の注目を集め、その後の5月、6月の世論調査でコーロル選択率は40%以上に上昇し、この急上昇が「コーロル現象」<sup>\*3</sup>と呼ばれるようになった。

1989年大統領選挙の22人の候補者の中でコーロルがもっともはやいスタートを切った事実は重要である。それは一種の電撃作戦であった。このタイミングを逸しては、多くの候補がテレビ番組に出るようになったあとでは、コーロルはさほど注目されず、コーロル現象は演出し得なかったかも知れない。

### 3. 世論調査と選挙

コーロル現象はテレビと世論調査が相互に作用しながら進行した。ブラジルにはギャラップ、ダタフォーリヤ(いずれも本拠はサンパウロ)、イボペ(リオに本拠)など世論調査機関がすでにかなりの年月にわたって活動を行なっていた。それぞれが全国ネットワークを持っており、商品嗜好調査、社会・政治に関する世論調査などを企業やマスコミからの委託で行なっていた。

選挙での候補選択率に関する世論調査は民政移

管後、特に盛んになったが、1985年の市長選挙では、サンパウロやフォルタレザでは世論調査での選択率と実際の開票結果の間に相当な違いがあった。特にフォルタレザでは、選挙の15日前での調査で、有権者の54%が選択していたと思われた候補が落選し、逆に20%の選択率しかなかった候補が当選した。このように世論調査の数字の信ぴょう度には問題があるのに、その数字が与える影響はきわめて大きい。同じ数字が異なったメディアで何回も報じられると、あたかもそれが国民の選択の実態そのものであるかのように受け取られるようになる。

1989年大統領選にあたっては、調査の信ぴょう度は相当に高まったかに見える。ダタフォーリヤ社は一次選と二次選の期間に行なった19回の世論調査で、全国の221のムニシピオで5250の調査相手にインタビューし(二次選の最終調査では1万2000の調査相手)，その選択率の誤差は上下各2%と発表している。一方、ギャラップ社は全国で4000の調査相手にインタビューし、その誤差は上下各3%であると発表している。第1表に見るように11月14日に行なわれた第一次選の最終世論調査での選択率と翌15日の選挙での得票率の間には、どの候補に関しても大きな開きはなかった。

### 4. テレビの影響度

近年、ブラジルでのテレビの影響力の拡大は著しいものがある。国民が情報を得、楽しみを見出す媒体として、また、そこを通して彼らの考え方が形成される媒体としてテレビが圧倒的な重みを持つようになった。カカ・ジェヴェス監督の1979年の映画「バイバイ・ブラジル」を見た人は、70年代のブラジルの北東部、北部で、伝統的なブラジルを代表する旅芸人の一座が、近代化を代表するテレビの浸透の前に客を失い、その在立を危うくされるのをユーモラスに描いていたのを想い出すに違いない。

旅芸人の座長がうらめしそうに「魚の骨」と呼

\*2 Antonio Padua Gurgel & David Fleischer, *O Brasil Vai às Urnas Retrato da Campanha Presidencial*, Brasília, D.F., Thesaurus, 1990年, 142ページ。

\*3 Ney Lima Figueiredo & José Rubens de Lima Figueiredo Júnior, *Como Ganhar uma Eleição : Lições de Campanha e Marketing Político*, São Paulo, Cultura Editores Associados, 1990年, 17ページ。

第1表 1989年大統領選挙時の主要政党の国会議席占有率、各党候補の世論調査での選択率と第一次選挙での得票率

政 党	候 补 者	党の国会議席占有率	世論調査での候補者の選択率*	(%) 第一次選挙での候補者の得票率 (11月15日)
PMD B(ブラジル民主運動党)	ウリセス・ギマランエス	39.7	5	4.43
PFL(自由戦線党)	アウレリアーノ・シャベス	20.8	0	0.83
PSDB(ブラジル社会民主党)	マリオ・コーヴァス	9.0	11	10.78
PDS(民主社会党)	パウロ・マルフ	5.8	9	8.28
PDT(民主労働党)	レオネル・ブリゾーラ	5.6	14	15.45
PT(労働者党)	ルーラ(ルイス・イナシオ・ダ・シルヴァ)	3.2	15	16.08
PRN(国家再建党)	フェルナンド・コロル	2.6	26	28.52
そ の 他	ギリエルメ・アフィフ他14名	13.3	20	15.63

(注) \*ダタフォーリヤ社による第一次選前の最終世論調査(11月14日)。

(出所) *Folha de São Paulo*, 1989年11月19日付, およびNey Lima Figueiredo 他, *Como Ganhar Uma Eleição*, São Paulo, Cultura Editores Associados, 1990年, 97ページ。

んだテレビのアンテナは、その後、経済危機の時期があったにもかかわらず増え続けている。1970年代には、まだ、街頭や集会所で住民が集まってテレビを見ることが多かったが、今日ではブラジルの都市部家庭でのテレビの普及率は97%を超え、低所得層の家庭にも、他の器具はなくとも、テレビとレコード・プレーヤーがおかれているのが普通である。1989年大統領選挙戦の最終テレビ討論を見た人の数は約9000万といわれ、これは当時のブラジルの人口1億4900万、有権者数8200万を考慮しても、なお、大きな数字、かつ高い割合であった。

テレビ台数が増え、視聴者が増えただけでなく、テレビ番組が以前よりも洗練され、視聴者により衝撃を与えるように変わってきている。とりわけ、1960年代の終わりに米国の技術とノウ・ハウを導入し、それを見事に国産化して最大の全国ネットワークとなったグロボ・ネットワーク(Rede Globo)は、ニュース、ドラマ、ショーなどを通じて国民の考え方へ大きな影響をあたえてきた。そのグロ

ボ・ネットワークが89年大統領選の帰すうに深くかかわり、コロルの勝利に大きく貢献する過程については、のちに述べるが、その前に、89年大統領選を迎えるにあたってのブラジルの政治情況を概観しておく必要があろう。それなくしては、いかに大衆操作に秀でていたとはいえ、既存政党の基盤を持たないコロル陣営がなぜ勝利をおさめ得たかの説明が不可能だからである。

## 5. 大統領選挙前の政治情況と政治家不信

ブラジルでは1985年3月、21年にわたる軍事政権支配のあと、民政に移管した。その時生まれた文民政権は、国民による大統領直接選挙ではなく、軍事政権下で定められた選挙人団による間接選挙を通じて成立したが、軍事政権支配末期での軍民間の力関係を反映して国民の総意を反映するものとなっていた。83~85年期のブラジルでは国民の政治参加を柱とする近代民主主義に近づこうとする気運が強く、それだけに新文民政権への期待は大きかった。しかし、その後の5年間、サルネイ

文民政権と連邦議会は、国民の期待を裏切ること多く、その政権末期には、国民の政府への不信、政治家全般への不信は著しく強まっていた。

1986年、プラン・クルザードで束の間の物価安定と消費景気で国民を喜ばせ、高い支持率を得たサルネイ政権も、その後はインフレの進行を阻止する有効な施策も政治決断もなく、国民生活は圧迫され、一方では新しい憲法を草案する議会も、あまりにも些細な論議に明け暮れ、しかも多くの議員は審議を欠席してブラジリアを離れ、議員としての真面目さが疑問視された。

1988年3月には制憲論争は大統領の任期を4年にするか5年にするかに焦点がおかれて、サルネイ大統領と与党の中道保守派は9000万ドルの軍資金<sup>\*4</sup>をばらまくことで5年に決定させた。ここに至って5年制と大統領への権力集中に反対する与党PMDB(ブラジル民主運動党)内の進歩派は離党して新党PSDB(ブラジル社会民主党)を結成し、連邦議会や州政府でのPMDBの優位がゆらぐ結果となつた。

国民は政治家のこうした動きを不信の眼で見まつた。サルネイとその周辺だけでなく、政治家全般に対して、国民の利益でなく私欲をまもるものに汲々としているものとの不信感がひろがった。1989年9月のイボペ社の世論調査ではサルネイの支持率は8%に落ち込み(彼は近年のブラジルで最も不人気な大統領となつた)<sup>\*5</sup>、77%は彼を信用できないと回答している。政治家の腐敗と権力者の無能がブラジルの病根の最大のものとみなす回答が大多数となつた。政治家への不信感は特に若年層の間で強い。

1983~85年期、国民の間で政治参加の意欲が高まっていた時期でも、世論調査では最も信用できないものとして国会議員と政府が挙げられ、逆に

最も信用できるものとして郵便局、教師、教会が挙げられていたが、政治家を肯定的に見る割合は今少し高かったに違いない。それが89年には政治家とは信用できないものの同義語に近づいていた。

ブラジルの政治に失望した進歩派のクリスチーナ・タバレス下院議員は「ブラジルの政治的、社会的制度は崩壊しつつあり、ブラジルは誰もが誰をも信用できない国に変わってしまった……ああ、あわれなブラジル」と嘆いたが、こうした情況こそ、反政府、反政治家の旗印をかけ、モラルの刷新による国家再建を唱えるコーロルの躍進を生み出す土壤であった。

政治家への国民の不信は強まっていたが、それは政治への完全な絶望ではなかった。1989年9月のダウフォーリヤ社の世論調査は、各年齢層で90%近い人たちが「人民にもっと決定権が与えられたならブラジルは今よりもよくなる」との考えを抱いていたことを示している。<sup>\*6</sup>しかし、国民にはそのための具体的な方策も、未来へのシナリオもない。それをつくるのは誰かにまかせたい。そしてその誰かは汚れた伝統的政治家ではなく、それを越えた指導者でなくてはならない。コーロルは自らを反政治家と呼ばせ、自分こそ国民が待望する指導者の條件を備える唯一の人間であることを印象づけようとした。

既存政党と政治家への国民の激しい不信の他にも、コーロルにのぞましい条件が整いつつあった。まず何よりも大統領選挙は国民による直接選挙であり、5年前の選挙人団による間接選挙のように既存政治勢力の有力者の取引によって決せられることがないこと、そして、かつてのような2大政

\*6 Figueiredo & Figueiredo, 前掲書, 102ページ。

\*7 Cristina Tavares, "Prefácio," Gurgel & Fleischer, 前掲書所収。

\*8 Ruth Corrêa Leite Cardoso, "Participação política e democracia," Novos Estudos, No.26, 1990年3月, 20ページ。

党の対立でなく、今や少なくとも6つの有力な政党があり、それぞれが大統領候補を立て競い合い、つぶし合うわけだから、コーロルのように政党の後だてが弱いものにも、有力党の候補をしぜぐことは可能であった。1989年ではなく86年11月に大統領選挙が行なわれていたとしたら、消費ブームで政府の人気がまだ高く、かつ与党PMDBの圧倒的優位が保たれていたから、コーロル陣営がいかに大衆メディアの操作で優位にあるとしても、既存政党の壁を破ることはできなかつたであろう。

#### 6. コーロルの戦略へのグロボ・ネットワークの協力

コーロルは最終的な勝利を得るには、国民間で他候補をはるかに上廻る人気を獲得せねばならぬことを知っていた。そのためには、他候補の先を越す政治マーケティングで、まず頭角をあらわし、予期される世論調査でその名が浮上したところで、その事実を徹底的に宣伝して選択率を高め、最終的に数千万の国民を前にしてテレビ討論で決着をつけるという戦略が練られた。

コーロルの家族はアラゴアスの新聞、ラジオ、テレビの所有者であり、コーロル自身、連邦下院議員時代にテレビ・ラジオ産業の支払う税金を軽減する法の立案者となり、これらを通してブラジル最大のグロボ・ネットワークと強く結びついており、その協力を計算に入れていた。<sup>\*9</sup>若く、ハンサム、スポーティで力強いコーロルは自分がテレビ向きの資質を高度に備えていることをグロボに納得させる自信はあった。

候補者が大統領に選出される要件の一つは政党に登録されていることである。コーロルは、かつて軍事政権下では与党PDS（民主社会党）に属し、文民政権成立後に新たに与党PMDBに転じたがウリセス・ギマランエス党首、サルネイ大統領と対立して離党し、1989年大統領選にはPRN（国家再建党）という国会議席占有率では2.6%を占めるに

\*9 Gurgel & Fleischer, 前掲書, 133ページ。

すぎない小党の候補としてのぞんだ。しかし、フロレスタン・フェルナンデス（著名な社会学者で、コーロルに対立するPT党下院議員）がいみじくも評したように、コーロルは「ラテンアメリカ最強の政党グロボ・ネットワークの候補」だったともいえる。<sup>\*10</sup>グロボがコーロルのマラジャ退治をどのようにとりあげ、どのように彼を全国的な英雄に仕上げていったかを次に見ることにしよう。

サルネイ政権後半での経済運営の失敗、それにもかかわらず延命をはかるとする大統領とその取り巻きが国民の不信を強め、一方では、国会議員や地方自治体の長の多くが、職権を濫用して家族や友人の便宜をはかり、財政が赤字などを問題ともせず、親せき、友人の名を公務員の給与リストに連ねさせていた。仕事をしないのに政府から高禄を食むものをマラジャと呼ぶようになっていた。インドのマハラジャのように働くかずして豪華な生活をしている連中という意味である。1987年アラゴアス州知事に就任したコーロルは、前知事時代入り込んだ多数のマラジャを狩り立て、公金を食いものにしている連中を追い出すキャンペーンを大々的にはじめた。マラジャとして給与リストからはずされたものの中に、前知事と同じスルアジー姓が54人もいた。

コーロルは前知事派からの圧力に妥協せず、マラジャ追放を断行していった。長い話し合いはせず、決定を引きのばさず、対立を覚悟で断行するコーロルの政治スタイルがこの時点ではっきりと見える。伝統的政治家がどこにも顔を立て、利益を調整し、曖昧なままで事態を引きのばし、できるだけ敵をつくらないスタイルをとるのとは明らかに異なっていた。

グロボ・ネットワークはこのマラジャ狩りとそこに見られるコーロルの新鮮なスタイルを全国ニ

\*10 Florestan Fernandes, *A Transição prolongada: O período pós-constitucional*, São Paulo, Cortez Editora, 1990年, 6ページ。

ニュースでしばしば取り上げた。それまで長年にわたってグロボの番組「ポン・ジア・ブラジル」で政治家たちにインタビューを続けてきたペアトリス・カストロ記者がマセイオに移り住み、コーロル番のようになって、コーロルとのインタビューをさかんに送り、それが週2回ないし3回、全国ニュースで流された。コーロルの名は全国的に知られ、腐敗と権力濫用に憤っていた民衆の間で、伝統政治家たちと妥協せずに腐敗を切っていくコーロルの新鮮さが人気を高めていった。コーロルのマラジャ狩りは他のテレビ・ネットワークでも報じられるようになり、有力紙の論説でもとりあげられ、コーロルは全国的な人物となった。

こうしてコーロルにはグロボの支えの下に全国的な英雄への道が保証されたが、グロボは後述するように、第二次選を報ずるニュース番組編成でもコーロルに大きく肩入れし、対立候補ルーラにとどめを刺す役割を果たすのである。

## 7. ブラジルとペルーの並行現象

未曾有の経済危機に面して政治運営、経済運営能力をなくしてしまった政府や伝統的政治家への不信が、既存政党に頼らない独立の候補者を抬頭させ、それを勝利に導く現象はペルーでも進行していた。ペルーの場合、政局が左右に分極化していくなかで既存政治勢力間の対立から自由な独立候補が有権者にアピールしたという要素がさらに加わるが。

1989年11月12日のリマ市長選で中道右派ながら既存政党から独立の人気ニュースキャスター、リカルド・ベルモンが勝利をつかみ、90年4月8日の大統領選を前にして、これまた既存政党から独立の運動、カンビオ90を母体としてアルベルト・フジモリが急激に抬頭し、第2位に食い込み、6月10日の決戦投票では有力対立候補バルガス・リヨサを破った。「ベルモン現象」「フジモリ現象」はブラジルでのコーロル現象にややおくれて起きた。いずれも有力視されていなかった候補が国民

からの支持を急速に高めたことを現象(fenômeno, fenômeno)と呼んだ。それらの「現象」は、既存政党の衰退とそれへの不信を背景としつつ、既存政治家にはない候補者の新鮮さを売りものにし、マスコミを最高度に利用した点では共通していた。

## 2 有力候補の選挙戦と結末

いよいよここで1989年大統領選にのぞんだ各有力候補がどのような選挙戦を戦ったかを見ることにしたい。まず、選挙の結果をみて、そこから、その勝因、敗因、戦略戦術の有効度を求めて過去にさかのぼることにしたい。

11月15日の選挙は全国で投票率は88%，PRNのコーロルが2061万票（有効投票の28.5%）で首位、PT（労働者党）のルーラが1162万票（16.1%）で2位、3位は僅差でPDT（民主労働党）のブリゾーラであった。有効投票の50%を獲得したものがいなかつたため、決定は12月17日の上位2名が争う第二次選挙に持ち込まれた。その結果は、投票率86%，コーロルが有効投票の53%，3508万票を獲得して勝者となり、ルーラは47%，3107万票に終わった。

ここでは、まず、第一次選を勝ち抜いたコーロルとルーラについて、その政治歴と選挙戦を概観し、次いで第一次選で敗退した有力政党と大物政治家たちの敗退の過程を見ることにしたい。そして最後にコーロルとルーラの間で戦われた第二次選での戦略、戦術の問題、政治マーケティングの要素がそこにどのように介在していたかを見ることにしたい。

### 1. コーロルの政治的継承と選挙戦

選挙戦を通じて、コーロルは既存政治家との関係を否定する姿勢をとったが、彼の家系は、まさに政治家のそれであった。選挙戦での宣伝文書は政治家であった祖父と父に言及する時、彼らが反独裁と反寡頭支配の民主主義者であったことを強

第2表 1989年大統領選挙(第一次)での主要候補の全国および地域別得票数

候補者	全 国*	北 部	北 東 部	中 西 部	南 東 部	南 部
コ ー ロ ル	20,611,011	1,549,205	5,970,327	1,757,269	8,545,095	2,785,902
ル ー ラ	11,622,673	573,763	3,534,386	669,237	5,883,914	958,868
ブ リ ゾ ー ラ	11,168,228	148,383	1,593,415	280,779	4,632,586	4,511,416
コ ー ヴ ア ス	7,790,392	171,510	1,178,392	320,643	5,363,412	752,991
マ ル フ	5,986,575	142,153	417,854	202,636	4,357,878	865,480
ア フ イ フ	3,272,462	151,642	405,225	286,852	1,548,384	879,925
ウ リ セ ス	3,204,932	155,834	1,205,155	283,870	987,065	572,865

(注) \*全国の得票数には国外での投票が含まれている。

(出所) 全国高等選挙裁判所, *Visão*, 1989年11月29日, 16ページ。

\*<sup>11</sup>  
調しようとした。

母方の祖父リンドルフォ・コーロルは1930年のヴァルガス革命後、ブラジル最初の労働大臣となり、その後、反ヴァルガスに転じ、亡命を強いられつつも反独裁の論陣をはった政治家であり、文筆家であった。大統領選を通じてポスターに何色かに染め抜かれたコーロル(Collar)というブラジルに珍しい姓は偶然の産物である。リオ・グランデ・ド・スール州の1824年来のドイツ移民の子孫であった母方の曾祖父(リンドルフォの父)が若くして死に、曾祖母はあちこちのホテルのメイドをしていたが、ドイツ生まれの河川運送業者ヨハン・コーロルと出会い、再婚し、そのためリンドルフォもそれまでのベッケル姓をすべて養父のコーロル姓を名乗ったからである。コーロルの完全な姓名はフェルナンド・アフォンソ・コーロル・デ・メロであるが、父方の姓メロはブラジルには多く、そのため、政治家としてのユニークな姓としてコーロルを表に出している。かつてのクビチェック(クビシェッキと発音する人の方が多い)大統領が、政治家として、父方の平凡なオリヴェイラ姓よりも母方の珍しい姓クビチェックを選んだのと同じ

動機である。

コーロルの父アルノン・デ・メロはアラゴアスの豊かな砂糖園主の家に生まれ、その後、家業は傾いたものの、ジャーナリストとして、新聞、ラジオ、テレビ局の所有者として、また、リオでの不動産業者として成功し、政治家としても下院議員、アラゴアス州知事、上院議員を歴任した。アラゴアスの政治には暴力がつきものであった。父アルノンは知事在職中、常に命を脅かされていたし、上院議員であった1962年、地元の有力者と対立し、自衛のために発砲傷害事件を起こし、議員生活を2年間停止せざるを得なかった。コーロルが空手など自衛の手段に強い関心を示し、また、大統領選挙を通じてアラゴアス州警察を護衛として率いていたのは、暴力と接する状況を身近に見て育ち、また、のちに彼自身、知事として脅迫をしばしば受けたからである。

コーロルは1949年リオデジャネイロで生まれた。父はアラゴアス州知事をやめリオで実業に専念していた。コーロルは幼少時の教育はもっぱらリオで受けたが、大学はリオのカトリック大学、ブラジリア大学、アラゴアス連邦大学で経済学、経営学を学んだ。マーケティングは彼の専門分野でもあるのだ。

ガイゼル政権末期の1978年に、29歳でマセイオ市長に任命された。市長時代のことは、今もコ-

\*11 Martin Claret & J.C.Bruno, *O Fenômeno Collor* (Edição Ilustrada), São Paulo, Martin Claret Editores, 1989年, 13~18ページ。

ロルの弱点、汚点となっている。連邦下院議員選に立候補を予定していたコーロルは、市長をやめる直前に何百人かを新しく市の職員として任命し、マラジャを自らでつくったからである。これに関する非難について、自分はだまされたのだ、市長退任の最後の週はめちゃくちゃに忙しく多くの書類をよく読まないでサインし、その一つに市職員任命の書類があったとコーロルは弁明しているが、マラジャ狩りをしている人間の過去の行為としての矛盾はかくし切れない。

コーロルは1982年に連邦下院議員、86年にアラゴアス州知事に選出された。この間、アラゴアスに巢食うボス支配の暴力と権力濫用に対決したことが、前述の彼の政治スタイルに大きく影響した。84年の大統領選に関して、彼は当初、直接選を支持し、その運動が敗退すると、間接選では自分にとって結婚の時の代父であるマルフを支持した。

コーロルがいつ1989年大統領選への出馬を心の中で決めたのかは明らかではない。しかし、前述のように、22人の候補の中で最もはやいスタートを切った。選挙の8カ月前の89年3月中旬からの集中的なテレビ選挙番組で国民の関心を集め、4月の世論調査の選択率で首位に立った。6月3日から9月3日までの5回の世論調査では、他の有力候補を相手に彼は40%という圧倒的な選択率を維持した。

コーロルは多数の候補が同時に参加するテレビ討論には第一次選ではわざわざ出演しなかった。世論調査で国民の40%が選んでいる候補が2%の候補と同じ持ち時間では不公平であるという理由であるが、実際には海千山千の老練な政治家たちの集中砲火を浴びるに違いないテレビ討論はマイナスの要素の方が大きいと判断したためである。自分は伝統的政治家とは違うのだ、別の次元にいるのだということを国民に感じさせる狙いも含まれていた。

一方コーロル現象が進むにつれて、PFL, PDS, PTBを中心に与野党の政治家が個々別々にコーロ

ル支持を表明はじめたが（その中にはサルネイ政権内にあり、過去に常にキングメーカーを演じてきたバイア州の超大物政治家アントニオ・カルロス・マガランエスも含まれていた）、これら政治家との関係はどうするかは政治戦略の重要なポイントであった。コーロル陣営としては、これら政治家の持つ組織、影響力を利用し得る利点を認めつつも、国民に直接訴えるテレビ放送で、反政府、反政治家イメージを弱めないことがより重要であり、これら政治家に深くコミットしない態度でのぞみ、貫き通した。

9月下旬、世論調査でのコーロルの選択率は低下はじめ10月には30%を切り、特に人気テレビ司会者シルヴィオ・サントスが立候補を表明したあとの11月初頭には、それに食われ、またアフィフ、コーヴァスらの候補の伸長に食われてコーロルの選択率は21%にまで落ち、2位のルーラ、シルヴィオ、ブリゾーラとの差は7%にまで縮まった。9月15日以後、テレビの無料政見放送がはじまり、他候補の伸長がはじまり、他方では『フォーリヤ・デ・サンパウロ』紙がコーロルが過去に公金を濫用していたとの一連の記事を掲載し、それらのマイナス効果がコーロル選択率に影響したからである。

しかし、選挙直前になって、のぞましい状況が生まれた。まずコーロル票を食うはずであったシルヴィオの立候補が全国高等選挙裁判所から不適格の裁定を受けたことである。そして、サルネイ大統領がコーロルの非難に対して彼を告訴すると公言したことは、コーロルの反政府姿勢を再び鮮明に浮び上らせる効果を生んだ。選挙直前になって世論調査でのコーロルの選択率は再び上昇をはじめ、26~27%に達し、11月15日、彼の得票率は28.52%で首位となり、2位ルーラに12.44%の差をつけ、第一次選は比較的安泰の勝利となった。

## 2. PTの抬頭とルーラの選挙戦

PTは上げ潮に乗っていた。1988年11月の市長選ではサンパウロ、カンピーナス、ポルトアレグレ、

ヴィトリアなど10の主要都市でPTは勝利を得た。79年、サンパウロのABCと呼ばれる工業地帯のストライキを指導したルーラは、翌年、PTを結成し、初代の党主となり、やがて党は多くの知識人、文化人の参加を得て勢力を拡大した。ルーラは82年のサンパウロ州知事選に出馬して4位、86年には65万票を得て下院議員に選ばれ、89年大統領選でPTの候補になることは党内の圧倒的多数から容認されていた。89年2月のイボペ社の世論調査ではルーラは大統領候補選択率で首位に立った。

1989年3月末、PSB(ブラジル社会党)、PV(緑の党)、PC do B(ブラジル共産党急進派——ブラジルにはPCBという別のブラジル共産党があり、これは独自の候補、穏健なロベルト・フレイレを立てていた)の3党がPTに選挙協力する協約が結ばれ、4党がブラジル人民戦線(FBP)を結成した。ルーラはヨーロッパ諸国と米国を訪問し、ヨーロッパの友党に選挙戦への支援を求めるとともに、対外債務問題、外資導入問題などについて関係者と話し合い、彼が単に政府批判を唱える政治家ではなく、政権についていた時の政策構想を持つことを印象づけようとした。

ルーラ(それはあだ名であり、本名はルイス・インシオ・ダ・シルヴァ)は1945年ペルナンブーコ州の奥地に生まれた。コーロルにとって貧困は4代前に終わっているのに、ルーラはまさに貧困のなかで生まれ育った。父はカボクロ、母はイタリア人の血をひいていた。サンパウロに出かせぎに行つた父は母の従妹とかけ落ちし、残された家族は食べ物もろくに得られず、52年末、活路を求めてサンパウロに移った。そこでは11人が1部屋と台所でごこ寝する生活であった。そんななか、兄弟たちは小学3年で退学せざるを得なかつたが、ルーラは母の努力で5年まで行くことができ、その後工場で働きつつ工業学校に通つた。工場での作業中に指を切断し、その補償金で家族のために家具を買った。ルーラも彼の妻(最初の妻は病死し、2度目の妻もその前夫は殺害されていた)も危険が一

\*12 杯の環境のなかで生きた。

1969年、サンパウロの工業地帯で労組の組織化が進行し、ルーラもそれに加わった。労組指導者として抬頭し、75年には冶金労組委員長となり、79年、サンパウロの工業地帯で長期ストを指導し、投獄されたが、最強の労組指導者としての地位は確固たるものとなった。この争議を通じてカトリック教会の草の根組織との結びつきが生まれ、89年選挙においても教会内の進歩派はルーラを強く支持した。

大統領選挙戦がはじまった時、ルーラはPTの支配する都市に拠点をつくり、そこからさらに攻勢に打つて出て、大衆集会、行進でその存在を広く国民に意識させた。しかし、当初高かった世論調査での選択率は低下し、6月から9月末まで5~7%と3位から5位の間を往々來した。

劣勢を挽回するためにイメージの転換が必要となつた。政治家気取りや不自然にインテリぶることをやめ、もっと急進化すべきだ、それによってPTこそ反独裁、反政府の唯一の本物の党であることを示すべきだとの声が陣営の中から出た。この影響を受けてルーラは国の経済運営を語るよりは社会的な矛盾を突く姿勢に重心を移した。この作戦は当り、9月、グロボ・ネットワークの1時間番組でルーラは反体制的対決姿勢でのぞみ、コーロルを軍事政権の寵児として非難し、大成功をおさめた。

9月15日、テレビの無料番組がはじまり、専門のテレビ・プロデューサーと多くの俳優の協力を得たルーラ陣営の番組は見事に編成され、視聴者を惹きつけた。10月初頭からルーラの選択率は高まり、10月半ばに14%、選挙直前には15%へと上昇し、僅差でブリゾーラの上に立つ2位となった。大衆集会をテレビで見せる作戦も成功した。しかし、複数の候補が参加するテレビ討論は彼にとつ

\*12 Mário Morel, *Lula, o metalúrgico: Anatomia de uma liderança*, Rio de Janeiro, Editora Nova Fronteira, 1989年, 21~38ページ。

て危険が一杯であった。人気上昇の彼を引きずり下ろそうと他候補は、PTのイデオロギーに関し、PT市政の矛盾に関し、また、彼や彼と組む副大統領候補ビゾル(すぐれた知識人が大土地所有者でもあった)の矛盾に関し、それを突く辛らつな質問やコメントを行ない、ルーラは守勢に立たされたからである。

選挙日が近づいた11月初旬、ルーラはそれまで行なってきたブリゾーラとコバスへの攻撃をやめ、コーロル攻撃を強めた。第二次選が射程距離に入ったからである。11月15日の投票の結果、ルーラは16.08%の得票率で2位となり、3位ブリゾーラを0.53%，約38万票の僅差ながらも引き離して第二次選進出を果たした。

### 3. 有力政党と大物政治家の敗退過程

前出の第1表は有力政党の国会での勢力と大統領選での得票力に著しいギャップがあることを示している。各有力政党はそれぞれ、過去に大統領になる機会を目前にしていた大物政治家を立てた。しかし、議会勢力では最大のPMDBと第2位のPFLにとっては、そうした候補を立てたことにこそ弱みと誤りがあった。PMDB候補のウリセス・ギマランエスは党の創立者であり、軍事政権下でそれを最も果敢に批判した闘士であり、大統領直接選を求める一大国民運動を指導した輝かしい過去を有し、運命のいたずらで大統領になる機会を2度も逸した政治家であった。しかし、サルネイ政権下でウリセスは下院議長として、時に大統領代行をつとめ、結果的にサルネイの不人気と心中することになり、また彼が指導した制憲議会の過程でPMDBの分裂を防ぎ得なかつたことも加わって、彼の権勢も人気も大きく低下していた。4年前まで国民間で高い人気を保っていた彼も、1989年には疲れ切った老人と化していた。クエルシアなど彼よりも若く精力的な指導者が党内にいるにもかかわらず、彼らがウリセスをさしおいて先に立てないところに党の弱みがあり、それが党员間に不

満を残し、ウリセスの選挙戦への党的支援は盛り上りを欠いた。

一方、議会勢力第2位のPFLはサルネイ政権の与党として閣僚の過半数を占め、政権にのめり込んでいた。1989年大統領選ではサルネイ政権に深入りした政治家ではなく、新鮮な候補として人気テレビ司会者かつテレビ局の社主シルヴィオ・サントスを推す意見が党内で強まった。しかし、89年5月の党大会の時点ではシルヴィオはそれを辞退し、党の最重鎮アウレリアーノ・シャヴェスが候補に選ばれた。アウレリアーノは軍事政権下で知事や副大統領としてすぐれた行政手腕と政治運営能力を示し、民政移管後の初代大統領への呼び声も高く、国民間の人気も高かった。しかし、89年のアウレリアーノは、常に権力の側にいるとの批判を強く受け、党内をまとめるこどもできず、党内各派は他党候補支援に走り、彼の選挙戦は惨憺たるものであった。彼もウリセスもテレビでのできばえは最低であった。

選挙が目前に迫った10月末、党首脳たちはアウレリアーノを下ろして、シルヴィオを復活させることを画策したが、アウレリアーノの抵抗にあい、結局、シルヴィオはPFLではなく、小党PMBから立候補した。しかし、全国選挙高等裁判所からシルヴィオの立候補は不適格と裁定され、彼の(また、それを背後から支援したサルネイの)野望は潰えた。11月初旬、シルヴィオは世論調査選択率で14%，3位にあり、その影響力の大きさは他候補にとて脅威であった。

議席第3位PSDBの候補マリオ・コーヴァスは、長い政治歴、行政歴が清潔なことで知られ、上院議員選挙で大量得票の記録もあり、有力候補であった。政権担当の実行計画を有する数少ない候補の一人であった。彼の演説が数字を使った講義調で選挙民の感情に訴えるのにとぼしいとの指摘が党内からもあがり、コーヴァスは競争相手候補への個人攻撃という、本来、彼が好まなかった戦術を採用せざるを得なかった。テレビ政見放送向け

の特訓を受け、固い言葉をおさえ、激しい言葉で個人攻撃を加えるように努力し、また俳優リマ・ドゥアルテを起用して彼に自分の考えをわかりやすく語らせた。コーヴァスの選択率は9月以後上昇を続け、第二次選に進むとの観測さえ生まれたが、結局、4位、10.78%の得票に終わった。

議席第4位PDSの候補パウロ・マルフは1984年の間接選で大統領の座に近づいていたのにそれを失った候補であった。彼は89年選挙では、諸団体への利益誘導型接近や金権政治の方式は持続しつつも、かつての悪(MalufのMal)の権化と評された強引で傲慢なイメージの転換をはかり、軽やかで、ユーモラスで涙もろい塾年男性をテレビで演じ、それは成功をおさめたといわれ、選挙戦の中盤で選択率を高めていった。<sup>\*13</sup>しかし、非道徳的な失言と州知事時代のスキャンダルの報道で集中砲火を浴び、守勢に立たされ、最終的に5位、8.28%の得票率に終わった。

PDTのレオネル・ブリゾーラは、大統領直接選挙が行なわれたならば勝者となる可能性が最も大きい候補と長年見なされてきた。ポピュリストかつナショナリストの政治家としての長い経験と実績があり、雄弁とカリスマで民衆をとらえてきた彼は、直選時代に入ったブラジル政界の最大の焦点であった。1986年末から89年初頭に至るまで、世論調査での選択率で常に首位にあった。

そのブリゾーラが二次戦に残れずに敗退したのはなぜか。一つには彼が必要とした他党との協力交渉(PDTはリオとリオ・グランデ・ド・スールにその支持層が片寄っており、全国的な基盤は弱く、ブリゾーラは左右を問わず協力する他党を求めていた)がすべて失敗したことにある。第二には、そのマスコミへの接近方法がコーロルやルーラの陣営に比してやや古く、与える衝撃が弱かったのではないかと思われることである。ブリゾーラは雄弁家であり、その雄弁とカリスマで民衆をひきつけた。

\*13 Gurgel & Fleischer, 前掲書, 74~77ページ。

ラジオ、テレビの経験も豊かだが、そこに個人の雄弁とカリスマをそのまま持ち込んだようなところがあった。他候補陣営のように俳優などを登場させずに、自分ひとりで演出なしに簡潔で直接的な呼びかけを行なった。

1982年のリオデジャネイロ州知事選で、劣勢といわれながら最終的に勝者となった彼には、自分の戦い方に自信を持っていたに違いない。しかし、奇蹟は全国レベルでは再現しなかった。ブリゾーラはルーラに約38万票引き離され、3位に終わった。67歳の彼は5年後の大統領選にもう一度賭けることになった。

#### 4. 第二次選——ネガティヴ・キャンペーンと最終テレビ討論

第二次選の行方は混沌としていた。第一次選で3位のブリゾーラと4位のコーヴァスは、敗北の衝撃から回復するのに手間どったが、第二次選でルーラを支持することを表明し、特にブリゾーラは大衆集会でルーラと並び国民にルーラ支持を訴えた。第一次選でブリゾーラとコーヴァスに投じられた票がどこまでルーラに流れるかが勝敗の一つの決め手であった。コーロルには第5位のマルフが支持を表明したが、コーロルはマルフ、アフィフら右寄りとされた敗退候補と表立って交渉するのは左右対立を超越した自分のイメージを損なうものとして慎重であった。

両候補とも専用機で全国を飛び廻り、1日に五つの大衆集会をこなし、その間にテレビに出演した。テレビ政見放送はルーラ側の方がすぐれ、コーロル陣営はこの段階になって番組作成担当者をとりかえざるを得なかった。そしてテレビ政見放送で、コーロルはこれまでの社会民主主義的立場から強固な反共の立場へと重点を移した。コーロルはルーラが過激で暴力志向的で私企業を崩壊させるとの印象を国民に植えつけようとした。ルーラはそれに反ばくし、彼こそ国民の願望の最大公約数であることを印象づけようとした。

コーロルはアラゴアスで北東部民衆の崇拜の的であるダミアン師の列席を得た大衆集会を開き、民衆信仰を通じたアッピールを図った。ルーラがカトリック教会の近代面とつながり、コーロルは同じ教会の伝統的民衆宗教の面とつながっていた。支配階級出身のコーロルが貧困階層の出身であるルーラよりも、教育水準の低い層、貧困な層からの票を多く集めた理由がこの辺りに見出される。<sup>\*14</sup>貧しい民衆が、支配階級の一員であるコーロルに多く投じたことは民衆の無知や支配階級による世論操作の結果とのみ断することはできない。ブラジルの民衆が貧者や抑圧されたものを救済する超自然的な力の存在を感じており、コーロルのカリスマ性が民衆の信仰とまさに合致した点が認められねばならない。

11月末での世論調査での選択率はギャラップが50対37、イボペが51対37、ダタフォーリャが48対39といずれもコーロルの優位を示していたが、この数字は12月17日の投票日が近づくにつれて接近した。ダタフォーリャの調査は12月8日で47対44、選挙4日前の12月12、13日では46対45.5とコーロルやや優勢だが、誤差分上下2%を考慮に入れると、どちらが勝つとはまったくいえない状況となつた。<sup>\*15</sup>ギャラップ社の12月11～13日の調査もコーロル45.6%，ルーラ43.8%で同様のきわめて接近した状況を示していた。<sup>\*16</sup>

ルーラは追い上げていた。コーロルは4月にコーロル現象を起こしたが、ルーラは今、選挙戦の最終段階になってルーラの波(Onda Lula)をひき起こしていた。3週間でルーラは彼を選択するものを600万増やし、コーロルは400万を失っていた。しかし、投票の4日前でまだ有権者の10.4%，840万人がどちらに投げるか態度を未決定のままでい

た。この分への働きかけも含めて、このあと12月13日の最終テレビ討論が勝敗を決するといって過言ではなかった。

受け身となったコーロル陣営は切り札としてネガティヴ・キャンペーンに訴えた。そのなかで特に強烈だったのは、ルーラのかつての恋人ミリアン・コルディロに金を渡して12月12日のコーロルの番組に登場させ、ルーラは自分が妊娠した時、中絶させようとしたと証言させたことである(中絶はされずにミリアンは子供を生み、15歳になるその娘は翌日ルーラ陣営の番組に出て父に好意的な発言をした)。中絶はブラジルで年間100万件以上行なわれていると推定され、多くのブラジル人はそれを特に異常なことは受け取っておらず、この証言がルーラへの信頼と期待を損ねる度合は小さかったと見られるが、証言はルーラ自身を著しく傷つけた。それ以後、ルーラはテレビ出演でそれまでの鋭さと即興性を失い、自分への攻撃に対してすぐに返答できなくなつたからである。

こんな状態でルーラは最終テレビ討論に出た。しかも、その前の24時間、あまりにも多忙な日程でほとんど眠つていなかつた。一方のコーロルはゆとりを持っていた。たくさんの付き人を連れてテレビ局に入り、少数で来たルーラに圧力をかけた。

9000万の視聴者が注視するなかで2時間45分にわたる最終テレビ討論が行なわれた。そこではルーラは叩かれても反撃できずに、ガードを下げたままノックアウトされるのを待つボクサーのような印象を与えた。それはブラジル人の多くが持つ階層秩序観、すなわち、上層の人間は下層の人間にに対して自然な優越性を持つとの考えが証明されたように視聴者の多くが感じた。<sup>\*17</sup>

選挙の2日前の夜のニュースでグロボ・ネットワークは前々日の最終テレビ討論の要約を流した。ただでさえよくなかつたルーラの最も悪い部分を

\*14 Velho, 前掲書, 45ページ。

\*15 Folha de São Paulo, 1989年12月14日付。

\*16 O Estado de São Paulo, 1989年12月15日付。

\*17 Velho, 前掲書, 46ページ。

選んで放映し、コーロルについては逆によかった部分を放映し、ルーラにとどめを刺した形になった。それまで態度未決定だった840万の相当な部分が、この夜、ルーラではなくコーロルに投票すべきだと決めたに違いない。選挙前日のダタフォーリヤの世論調査(全国で1万2000の調査相手)での選択率はコーロル47%，<sup>\*18</sup> ルーラ44%でコーロルが上昇傾向に転じた。翌17日の投票ではコーロルが有効投票の約53%，3508万票を獲得し、ルーラに約6%，400万票の差をつけて勝者となった。

ルーラはこうして敗れたが、最後の数日の選挙戦の戦術を、特に最終テレビ討論への対応をより綿密に準備していたなら、あるいは勝利をかち得

たかも知れなかった。それだけに敗者の側では衝撃をかくし切れずに、人は常に権力から疎外されると、ブラジルの政治情況を悲観的に見る向きも強いが、他方では、ここまで追い上げたこと自体、人民の勝利を意味するのであり、それは5年後の1994年大統領選に希望を与えるものとの評価<sup>\*19</sup>も存在するわけである。

〔付記〕 本稿は中南米総合研究事業1990年度の研究会「90年代ラテンアメリカの政治変動と構造問題」の成果の一部である。

(なかがわ・ふみお／筑波大学教授)

\*18 Folha de São Paulo, 1989年12月17日付。

\*19 Fernandes, 前掲書, 26ページ。